昭和２８年８月１５日は宍道湖畔で終戦を迎える

koberyo1

昭和19年７月10日、甲種飛行練習生の予科練志願兵として、当時、久里浜は横須賀海軍通信学校に入校したことは前に書いた「入隊の日」において詳らかにしたとおりである。
翌年、昭和20年の4月10日、わたしは晴れて練習生を卒業すると、一一14期生であった、久里浜からランチに分乗し、こんどは千葉県の館山飛行場に行き、その五日後には福岡県の博多海軍航空隊に配属された。
この時に移動手段として搭乗したのが、いわゆる二式大艇（ニシキタイテイ）であり、旧日本海軍の4発大型飛行艇であって、後年、調べてみると、初飛行は昭和16年であり、製造者は川西航空機であった。生産数は167機であったが、あまり活躍した記録は残っていない。

わたしの配属先ではあるが、正式名称は、連合艦隊所属第一護衛艦隊の〇〇〇航空隊であった。太平洋方面への輸送作戦の護衛任務を有した第一護衛艦隊は、その頃は連合艦隊はすでにして戦闘能力を失った頃ではあったが、中国の上海にその本隊があり、わたしは博多にいてたえず上海と連絡を取っていた。
当時、わたしは十七歳の飛行兵長として活躍していた。しかし、戦局の後退とアメリカの潜水艦の出没とで、太平洋岸からの物質輸送が困難になり、このため日本海側の新潟、直江津、柏崎から輸送が頻繁に行われるようになったのである。したがって本隊は舞鶴に移動を余儀なくなくされたのだった。

わたしの仕事はといえば、毎日、本隊からの入電をキャッチすることであった。受信機は沖電機製作の受信機と記憶している。兵舎はアメリカ側の攻撃が激しいので、即転用できる施設が望ましいということもあり、部隊のなかではなく、博多から近距離にある「今宿」というところ、それも「今宿町役場」を利用させてもらうことになった。
受信した電文の暗号文は翻訳されることになるが、その翻訳者はHという名の一等兵であった。H一等兵とわたしはこの時、格別の関わりはなかった。ただ四十歳の召集兵として彼はわたしの配下であり、指示・命令はわたしの方からだしていた。日々の戦況は悪くなるばかり。こうした戦局不利に関する情報、もしくはニュースは断片的ながらH一等兵から聞いていた。わたしは右から左の耳で受け流し、他に漏らさなかった。

本隊は舞鶴に移動し、と同時に現場の一部は宍道湖を利用した。玉造に分遣隊を設営し、韓国の領海にある分遣隊と共同で、日本海の輸送船団の護衛にあたることとなったのである。
玉造分遣隊には二機の水上偵察機が配備された。わたしたちに必要な物質は千葉の館山基地から「二式大艇（ニシキタイテイ）」、一一海軍最大の大型飛行艇である、によって宍道湖まで運ばれてきた。
我々は湖上に着水した飛行艇まで小舟に乗って人や荷物を受け取りに行った。その夜は、わたしにも酒や煙草の配給があって楽しい夕食会が開催された。
この分遣隊には司令部として、中尉、少尉、准尉が一名ずつ、それに飛行機の搭乗員（おもに下士官）が四名、通信室が八名くらい、他の兵が二ないし三名といった一団が湖岸の旅館、八勝

園に居住した。整備兵や基地設営隊などが旅館の庭に建てた宿舎で生活し、全体で五十人近くの大世帯になっていたかと思う。
　天気が悪く雨が多く降った日などは、湖から鯉が田圃のなかに入ってきたので、ビール瓶をもって叩いたり、追いかけて捕まえたりでお騒ぎになった。捕まえた鯉の料理は、鯉こくや唐揚げにして食べるなどし、実に楽しい夕食会になったことを記憶している。

　八勝園の本部は通信室を分離することになり、通信基地の設営を毎日の日課として作業を行っていた。そして何の変哲もないある日のことであった。八勝園は旅館であったにもかかわらず、突如としてグラマン機からの攻撃を受けたのである。
　見張り所の櫓（ヤグラ）にいた当直者は、グラマンの機関銃からの機銃掃射の狙い撃ちされ、爆弾を投下された。昭和20年7月28日の昼に攻撃を受けたのだった。
　この機銃掃射の掃射と、爆弾の投下によって、四十名近くの人間が死傷した。
　二機の水上偵察機は待避していて難を逃れたが、八勝園に置いた本部へのピンポイント攻撃が可能になったのは、アメリカが事前に日本側の暗号文を解読しており、十二分にこちらの状況を熟知していたことによる。しかも、昼の食事の兵隊が食事で一箇所に集まる時間帯を効率的に狙ったのである。

　機銃掃射があったその時刻、わたしはちょうど八勝園から離れた場所にいた。
　M兵曹を中心としたグループにいたのである。
　しかし、M兵曹が指揮するその作業がなかなか進捗せず、お昼どきになっても八勝園に戻ることができなかったのである。
　しかも、なぜ作業が進捗しなかったかというと、作業を指揮者であるM兵曹がこの時に限って変なこだわりをみせ、これがもとで我々は八勝園に帰ることができず、明暗を分ける結果となったのだった。
　その時のことを想い出すと、もう昔のことであるのに命拾いしたことに身ぶるいする。そして、ちょうど昼飯時だったので人が一箇所に集まっていたことが被害を大きくしたのだった。

　M兵曹をはじめとした我々は遅れて八勝園に戻ったがゆえに、その惨劇を目のあたりにしたのだった。
　わたしたちはふたり一組になり、懸命になって死傷した兵員を玉造温泉の中にある陸軍野戦病院に搬送する手伝いをした。血の臭いが立ち込めた、そのむごたらしい情景を直視することができなかった。これが7月28日の真夏の暑い日のことである。
　それからの基地での日々の作業は、グラマンの攻撃であちこち破壊されていたし、死傷者が多数でたこともあり、少しも動かない停滞した状態に陥った。
　わたしもまた、目標を喪失した気分だった。やる気をなくしてしまったのだった。本部長の士気を鼓舞する訓話もあったが、集会も何となく気まずい雰囲気の毎日だった。精神的に打ちのめされた感があった。

日本海軍は壊滅状態にあるとH一等兵から聴いていた。
H一等兵に初めて会ったのは八勝園にもうけられた電信室である。わたしが受信した電報はすべて上司に届けられる前に「翻訳」というステップを踏まなければならない、ということである。
H氏は赤紙で召集され、一等兵として博多の〇〇〇部隊に入隊し、翻訳係りとして訓練された兵隊さんだった。年齢はたしか45歳くらいで家族は東京に残してきたそうだ。学歴は慶應義塾大学の経済学部出身で学生時代は陸上部の選手だったとのこと。勤務先はM銀行の本店勤務の銀行マンで、なかなかの文才の持ち主だった。
文章の作成法などを指南してくれる彼は親切な一等兵だった。十七歳の飛行兵長の指示命令は、時々、この四十五歳の部下であるH一等兵のアドバイスに従うものだった。

このH一等兵とは時おり一緒に酒を酌み交わすチャンスがあったので、世の中のことなどをいろいろと教えてもらった。
経済や社会におけるお金の循環のことなど、いや、それよりももっと広く包括的に勉強しないと世渡りはむずかしいなどと、実に本質的なことを教えてくれたように思う。また、どうしたら勉強ができるようになるかといった理にかなったな勉強方法のことなどや、自分の甲羅の大きさに合わせて物事を判断しがちだが、しかしやはり根本的には自分で考えるしかないのだ、と知らされもした。

８月15日に重要な発表がある、との知らせを受け、〇〇〇部隊の全員が集合した。
夏の暑い陽射しを受けながら三々五々、全員が集合した。大尉からの説明は戦争は終わった、とのことだった。
昭和19年７月10日に横須賀通信学校に入隊し、昭和20年８月15日に宍道湖湖畔で終戦を迎えることになった。ちょうど一年のあいだの従軍経験である。十七歳の未熟な志願兵とはいえ、兵籍に入って貴重な体験をしてしまったわけで、その体験を持て余してしまっている、というか自分でも体験の意味がよくわからなかった。

この宍道湖湖畔はよい土地柄で、やさしい人たちが多かった。
一度、故郷に帰った兵隊さんが戦後ふたたびこの地へと舞い戻り、良き伴侶を得てこの地で暮らしを立てた人が少なからずいたことからも、そのことが窺えるのである。
宍道湖湖畔と、その周囲にひろがる田園風景は心のやすらぎを得る、まことに良いところだったのである。